The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「人種」のメロドラマ : フランシス・E・W・ハーパー『アイオラ・リロイ』におけるロマンスと政治
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2002, 2001, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「人種」のメロドラマ

——フランシス・E・W・ハーパー『アイオラ・リロイ』におけるロマンスと政治——

里　内　克　巳

1. 立ち上がる黒人女性作家たち

19 世紀末から 20 世紀初めにかけての世紀転換期は，アメリカ黒人にとって試練の時期であった。 南北戦争の終結によって長年の奴隷の身分から解放された喜びもつかの間，彼ら・彼女らが社会に参画するための諸権利は，再建期の政治的失態によって骨抜きにされてしまう。北部が介入をやめた後の南部諸州では，白人至上主義的な勢力が台頭し，黒人への男女を問わない凄惨な暴力行為が急増していく。この時期に主流の文学者・知識人のとった態度は，少数の例外を除いて，沈黙を守るか現状肯定的な態度を取るかのいずれかだった。過酷な状況に対して抗議の声を上げたのは黒人自身，それも女性であったことは特筆すべきであろう。ジャーナリストの Ida B. Wells，文学者の Pauline Hopkins，教育家の Anna Julia Cooper，そして本稿で取り上げる Frances E. W. Harper といった黒人作家たちが，女性の社会進出の機運に乗じて登場し，差別や暴力を容認するアメリカの現状を告発したのだった。

フランシス・ハーパーの場合，その文学者・社会改革者としてのキャリアは長く，活動の起点は南北戦争前にさかのぼる。彼女は 1840 年代から詩作を始める一方で，奴隷解放運動や黒人・女性の権利を擁護するための講演活動を精力的に行なった。実質的に唯一の長編小説 *Iola Leroy; or Shadows Uplifted* を 1892 年に出版した時，ハーパーは 68 歳という高齢になっていたのだが，現在では彼女は，好評を博したこの小説の作者として主に記憶されている。とはいえ，南北戦争とその直後を時代背景とする『アイオラ・リロイ』が批評の対象として本格的に取り上げられるようになったのは，ここ 10 年ほどのことでしかない。長く続いたモダニズム偏重の批評においては，作品を通して作者が発信する政治的メッセージには，十分な関心が払われず，加えて通俗的なロマンス小説の体裁を取っている点も不利に働いた。そのような旧来の文学観に大きな修正を迫った Jane Tompkins の *Sensational Designs* が出版されたのは 1985 年のことであるが，その頃からハーパーの小説に対する肯定的な批評が徐々に現れ出したのは興味深い。

本稿は，作品の美的側面と政治的側面を不可分のものとして捉える近年の批評動向に沿いつつ，『アイオラ・リロイ』におけるハーパーの工夫を読み解く試みである。ハーパーが大衆小説・感傷小説というモードをどのように利用して，自らの政治的立場を表明したの

か，という点を探ることが本稿の主たる目的であるが，その際にはその政治的立場自体の複合性を，ぜひとも考慮に入れる必要がある。人種に関わる意見表明をハーパーが感傷小説のロマンス的要素を利用して行なったのならば，そこには必然的に彼女のジェンダー観も介在してくるからだ。黒人と女性という二つの関心事が時には相寄り添い，時には衝突しながら表出されていく作品のダイナミズムを，物語展開ならびにレトリカルな側面に分析の光を当てることによって明らかにしてみたい。[1]

2. 拒絶される求婚

『アイオラ・リロイ』の感傷小説・家庭小説的な枠組みが，作者ハーパーの政治的主張を盛り込む器になっていることを確認するためには，まず何よりも物語展開の主軸である混血女性アイオラの結婚をめぐる諸エピソードを検討することが先決であろう。北軍の負傷兵たちをかいがいしく看護するアイオラに心を打たれ，北部出身の白人医師 Gresham は結婚を申し込む。しかしアイオラは，自分に向けられた愛情に感謝の意を示しながらも，グレシャムの求婚を断固として退け，虐げられてきた黒人たちのために身を捧げることを誓う。報われない恋愛やヒロインの自己犠牲といった趣向は，同時代の感傷小説の常套であったのだが，『アイオラ・リロイ』の場合，通俗小説の定石に迎合するだけにとどまらない，作者の政治的主張がそこに込められていることを見逃すわけにはいかない。

グレシャムとのやり取りの中で，アイオラは何度も「乗り越えることのできない壁(insurmountable barrier)」が二人の間にはあるという言い方をする。この言葉の意味するところは少々曖昧であるが，両者の間の人種的な意識の違いという意味合いが主として念頭に置かれていることは間違いない。ミシシッピの白人農園主の娘として育てられたアイオラは，母親が元奴隷であったことが判明し，これまで享受してきた特権を突如奪われた。奴隷としての苦難の体験の後，彼女は白人としての意識を完全に捨て去り，黒人として自己を規定するようになっている。二人の交わす議論を辿っていくと，南北戦争後の人種をめぐる問題をどのように扱うべきなのか，ということに関して，北部白人と南部黒人が議論を行なっているかのような印象が与えられている。したがってアイオラがグレシャムを袖にする場面を読む際には，この二人の人物，とりわけグレシャムが政治的にどのような立場に立っているのかをよく吟味する必要がある。

グレシャムは黒人自らが「声」を獲得することの重要性を説き(115-116), 白人の作り上げた「文明」に対抗しつつ，黒人の地位を向上させる必要性を説く。その限りにおいて彼の人種に関する意識は，黒人の立場に理解を示した進歩的なものであるのだが，その一方で，黒人自らが自立して白人と対等の「文明」を築いていく能力を果たして持っているのか，という点になると非常に懐疑的・悲観的な立場を取り，そこでアイオラと対立する。黒人をもともと白人よりも劣ると考え，後者の慈悲深い保護のもとに前者が置かれるのが，双方に

[1] 本論におけるテクストとして，Frances E. W. Harper, *Iola Leroy; or Shadows Uplifted* (Boston: Beacon Press, 1987)を使用する。本文中の括弧内の数字はすべてこの版による。

とって最も好ましいことだというのが，戦後の北部・南部を含めたアメリカ白人の人種問題に関する見方の主流を占めていたのだが，グレシャムの人種観も結局はそのような当時の有力な見解を反映したものだと言える。したがってグレシャムは，一見人道主義的な立場に立ってはいるものの，その実，黒人が自らの力で文化・文明を築き上げていくための力を奪い取っているところが自分の論理にあることに気づいていない。グレシャムの求婚がはねつけられるのは，結局のところ，そうした彼の人種観をアイオラが，というより作者が是認していないことの表われなのである。

更にこの場面をより興味深く，またより複雑にしているのは，人種の問題にジェンダーという要素が入り込んでいる点だ。よく指摘されるように，19 世紀のアメリカにおいては，奴隷制の影響によって黒人全体は男らしさ（manhood）をなくし，女性化あるいは幼児化してしまっているという認識が一般に広まっていた。言い換えれば，黒人という人種的・民族的な存在は，しばしば男性性の喪失という「性」のフィルターを通して眺められてきたのである。その点を鑑みるならば，グレシャムとアイオラの例に見るように，感傷小説のロマンス的道具立てを通して異人種間の問題に関する主張を行なう場合，表面上はどれほど「進歩的」な見解を披露したところで，「黒人」を女性として無批判に表象しているならば，上述したような問題を孕んだ人種観に依拠してしまっていることになる。

ハーパーは，このような危うさを十分に承知しつつ，半ば確信犯的に筆を進めている節がある。実際，以下の引用に見るように，グレシャムの黒人観は，彼の女性への見方と不可分なものとして提示されている。

> To him the negro was a picturesque being, over whose woes he had wept when a child, and whose wrongs he was ready to redress when a man. But when he saw the lovely girl who had been rescued by the commander of the post from the clutches of slavery, all the manhood and chivalry in his nature arose in her behalf, and he was ready to lay on the alter of her heart his grand and overmastering love. (110)

北部人であるグレシャムは，現実の黒人と親しくつきあった経験を持たないため，黒人をピクチュアレスクな存在として捉え，ロマンスの色眼鏡を通して人種の問題を考えがちである，と語り手は説明する。白人としてのグレシャムが，社会的・生得的に劣っていると考える黒人に接する態度は，広い意味で騎士道精神(chivalry)の発露と呼びうるものであるが，引用文においては，そうした騎士道的態度は人種からジェンダーのレベルへと微妙に変換されていき，グレシャムがアイオラのことを考える時，「黒人」ということが念頭に置かれているのか「女性」として捉えているのか曖昧になってしまう。この例に限らず二人の会話のなかでは，話題の焦点が人種に関してなのか，性に関してなのか不分明な個所が多い。ここで白人・黒人の関係と，男性・女性の関係は意図的にぴたりと貼り合わされているかのようである。

女性にせよ黒人にせよ，他者に対するグレシャムの態度は「騎士道」という共通の精神に貫かれている。その点を考慮すると，彼の求婚をアイオラが拒絶するというエピソードは，感傷小説のフォーミュラに従いつつもそこから逸脱する側面もあるのが明瞭に見て取れる。既に触れたように，ここでは黒人は白人に保護されるべきだという考え方が厳しくはねつけられる。しかし同時に，女性は男性によって保護されるべきだという考え方も，暗に否定されている。このような「性」と「人種」にまつわる二重の騎士道的態度，ひいてはそうした態度が立脚する父権的温情主義を，ヒロインの求婚拒絶という筋書きを通して作者は一挙に批判したのだった。[2]

ハーパーは物語も終わりに近づいた 27 章で，アイオラにグレシャムの求婚をもう一度拒絶させてだめを押した。ここでハーパーは，ロマンス・プロットが孕む政治的メッセージをより明確に表明するために，直前の 26 章“Open Questions”でグレシャムの政治的意見をより具体的に提示している。様々なバックグラウンドを持った医師・知識人が寄り集い，戦後の南部社会再建について議論を行なうこの章のなかで，グレシャムはかなり微妙な立場の表明を行なっている。彼は頑迷な南部の人種主義者 Latrobe を出し抜く Latimer 医師の計略に荷担している(240)ことからも分かるように，南部の黒人の立場に共感を寄せる人物として描かれてはいる。しかしながらグレシャムの考えには問題を孕む部分があり，そのために作者はこの医師を必ずしも好意的に描いていないのだ。グレシャムは白人の生得的な優秀さを信じて疑わず，南部黒人に選挙権を与えたのは政策上やむなく取った措置だと弁解して(223-224)，黒人の政治参加を当然の権利だとは考えていない。（そのため彼はアイオラの叔父で元奴隷の Robert Johnson と対立する。）黒人を主流の白人社会に穏健なやり方で同化させるのが人種問題の最終的な解決策であるという彼の考え方(228-229)も疑問を残す。ここでもグレシャムは，南部黒人に同情的ではあるが真に問題を突き詰めて考えることをしない当時の北部白人の見方を代弁している。そして作者はそのような考えを明確に否定するために，次章において再びアイオラにグレシャムの求婚を拒絶させるのである。

かくして『アイオラ・リロイ』において，ヒロインがどのような男性を拒絶し，また選びとるかという問題は，その男性がどのような政治的信条を持っているか，そして作者がその信条に対してどのような意見を持っているのか，という点と密接に繋がっている。感傷小説にありがちなプロットを借用して読者の興味を牽引しつつも，作者ハーパーは自らが正しいと考える政治的見解を読者も共有するように巧みに導いていくのである。

3.「影」と「病」のレトリック

前節では物語のメロドラマチックな要素の典型として，恋愛と結婚のプロットを取り上げ，そこに盛られた作者のメッセージを検討してみた。しかしながら，物語における「政治」と「ロマンス」の結合は物語展開のレベルに限られるものではない。この節では，物語

---

[2] この論点については，Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist* (New York: Oxford University Press, 1987)が僅かながら触れている(90)。

を語る際にどのような言葉が使われているかという点に焦点を当て，問題をより微視的に掘り下げていきたい。この小説においては，奴隷制を「影」や「病気」として表象するというレトリックが頻繁に使われる。このような比喩表現は手垢にまみれ通俗的であるとさえ言えるのだが，ハーパーは常套的なレトリックを巧みに再利用して，寓意に富んだ物語を作り出そうとしているのである。その工夫を，語り手が南北戦争の 20 年前に物語をフラッシュバックさせてアイオラの出生の秘密を開示する，9 章以降の部分を中心に検討してみよう。

アイオラの父親である白人農園主 Eugene Leroy は北部に出かけ，学校を卒業する Marie（アイオラの母となる元奴隷）に会いに行く。学校では式典が行なわれ，そこでマリーは参列者の前で，“American Civilization, its Lights and Shadows”と題された発表を行なう(75)。ここでは，もちろん「影」とは奴隷制であり，それが人々に対してもたらす悲しみ，あるいは黒人に対する人種偏見を比喩的に表現している。だが『アイオラ・リロイ』において留意すべきことは，「影」は比喩のレベルにおいて限定的に現れるのではないということだ。興味深いことに，この物語の中で奴隷制の「影」は，登場人物の身体，特に顔に文字どおり表われてくる。例えば，この式典に出席し，マリーの話を聞いているユージンの顔には困惑の「影」が広がっていく(75)。混血の事実を知らされていない息子の Harry が，遊び仲間に「黒んぼ」という言葉を投げつけられたことを聞いた時，ユージンの顔に「影」がよぎる(81)。やがて自分とその子供たちを奴隷の身分に追いやることになるユージンの従兄弟 Alfred Lorraine が訪れて来る時，マリーは自分の家庭に「影」が落ちるように感じる(89)。登場人物の顔に影がよぎる場面は，アイオラの顔にさす陰りにグレシャム医師が言及する場面(57)を皮切りに全篇を通して頻出し，枚挙にいとまがない。

「影」は比喩的にも字義的にも奴隷制を表わしているという訳だが，そのヴァリエーションとして，物語における「病」の主題の扱いも併せて見ておく必要がある。子供たちを南部にある自分の家庭で育てるかどうか妻と議論をした際に，ユージンは“but I do not wish them to grow up under the *contracting* influences of this race prejudice.”(83　引用者強調)と言って反対する。ここでは人種的な偏見が伝染病の比喩で語られているのであるが，やがて物語は，ユージンが旅先で黄熱病によって命を落とすという皮肉な展開を見せる。

ユージンは若い頃に放蕩に明け暮れた過去を持ち，その意志の弱さがことさらに強調されている。また，奴隷制の撤廃に関してもなまぬるい態度を取り，近づいてくる南北戦争を予期することもできないその時代感覚のなさ(78)や，奴隷制社会に真っ向から立ち向かう勇気のなさが批判の対象になっている(86)。そのような文脈を念頭に置いて，ユージンが黄熱病に罹る際の描写を読むと，面白いことに，まるで自分の肉体的虚弱さではなく意志の弱さが病気を招いたかのような書き方がされている。“As they journeyed on Leroy grew restless and feverish.　He tried to brace himself against the infection which was creeping slowly but insidiously into his life, dulling his brain, fevering his blood, and prostrating his strength.　But vain were all his efforts.” (92) こうした描写は，まるで奴隷制やそれにまつわる社会悪が病気の姿をとって彼に襲いかかったかのような印象を読み手に与える。更に興味深いことに，病死

したユージンの顔には，「影」が凝縮していく。“A mortal paleness overspread his countenance, on which had already gathered the shadows that never deceive.” (93) したがって，ユージン・リロイの病死を描くこの場面は，先ほど述べた「影」の表現と「病」の表現が同時に現れるという点でも，物語のひとつのクライマックスを形成していると言える。また彼の死によって再び奴隷の身分に戻されることを知り，妻のマリーは脳炎に罹り，同じ病気に幼い娘のGracie も倒れてしまう。かくして「病気」に関しても，「影」と同様に，比喩と字義という二つのレベルの循環的関係を確認することができる。

「病気」の重要性に関しては，更に付け加えるべきことがある。それは，この表現がレトリックのレベルにとどまらず，物語の主題自体を支えるものになっているということである。奴隷制が病気の比喩で表現される一方，そこから南部社会，ひいてはアメリカ社会全体はそのような「病」に蝕まれた人間の身体として表現される。例えば，物語後半において，アイオラとグレシャムが会話を交わす以下のような場面がある。

> “Slavery,” said Iola, “was a fearful cancer eating into the nation’s heart, sapping its vitality, and undermining its life.”
> “And war,” said Dr. Gresham, “was the dreadful surgery by which the disease was eradicated. The cancer has been removed, but for years to come I fear that we will have to deal with the effects of the disease. But I believe that we have vitality enough to outgrow those effects.” (216)

アイオラの家族の他に黒人の有識者たちが寄り集い，戦後の南部社会再建の方途に関して「座談会(*conversazione*)」を行なうという趣向の 30 章“Friends in Council”においても，Carmicle 牧師が“Time alone should tell whether or not the virus of slavery and injustice has too fully permeated our Southern civilization for a complete recovery.” (259)と語る場面がある。癌と細菌という違いはあるものの，奴隷制とそれがもたらす悪徳を宿痾として抱えた南部社会を，「病」に侵された身体と捉え，その根絶作業である南北戦争を一種の治療・手術と見なす発想は共通している。

そのようなレトリックを視野に入れれば，『アイオラ・リロイ』で頻繁に登場する医師という職業には，「身体」としての国家・社会を「治療」する社会改革者としての役割が負わされていることが見えてくる。ラティマー，グレシャム，ラトローブという３人の医師たちが，南北戦争の「後遺症」を治療する上で，それぞれに異なった「処方箋」を提示するという“Open Questions”の章は，そうした医師の象徴的な役柄が最も顕著な形で現れている部分だと言える。またアイオラがどのような男性を選びとるのかという問題が，南部の改革に関して作者がどのような見解を是としているのかという点と直結していることは，既に前節で説明した通りであるが，アイオラに求婚する二人の人物，すなわちグレシャムとラティマーが，いずれも医師であるのは，この職業が物語において社会改革者の一種の寓意と

して機能しているということから来る必然なのである。

このような医師という職業の持つ寓意性・象徴性は，小説の設定である「戦争」と大きな関わりを持つがゆえに，物語全体が帯びているアレゴリー的性質を把握する重要な手掛かりとなってくれる。というのも，この小説のなかでは医師，兵士，そして教師という三つの職業は，奴隷制・人種差別と戦う使命を担うという共通点で，互いに等号で結ばれる関係にあるからだ。（もちろん，更にこれらの職業すべてを包括するような位置に来るものとして，真の意味でのキリスト教精神を体現する聖職者を加えることもできるだろう。）南北戦争時には，グレシャムとアイオラは野戦病院で働き，ロバートとハリーは北軍に身を投じて戦闘に参加する。医師と軍人という役割の違いこそあれ，南部の奴隷制と戦うという目的では二つの職業に差異はない。また，戦後になって教師として転身するハリーに関して，"Harry turned his attention toward them, and joined the new army of Northern teachers." (121) と語り手は述べる。解放された黒人たちを啓蒙する使命を担う教師は，南北戦争時の軍人と同じ役割を果たしている，という認識がこの文章からは窺える。したがって，作者ハーパーは，軍人と教師の間にも明確な差異を設けていない。[3] 南北戦争の前と後という断絶ではなく，むしろその連続性を彼女は強調する。奴隷制が法的に廃止された後も，本当の意味での「戦争」は終了していない，という厳しい認識がそこにはある。逆の見方をするならば，小説前半で描かれる南北戦争をめぐるドラマも，1890 年代という時点から単純に懐古的な態度で書かれたものではないことが推察できる。小説が書かれている時点である今，アメリカの黒人・白人が人種問題に対してそれぞれいかに主体的に関わっていくべきであるのか，というモデルを作者は兵士たちの活躍を通して示しているのである。言い換えると，過去の南北戦争という出来事をリアリズムの様式で書いているのではなく，今現在の社会的抑圧とそれに対する抵抗を「戦争」という寓意を通して書いているという側面もこの小説にはある。

4. 黒人指導者とジェンダー

ここまで考察を進めた所で，だが，と私たちは立ち止まらなければならないのかもしれない。なぜなら「社会改革者」としての医師・兵士・教師という職業の役割を追いかけていくと，ここでも性差の問題に最終的にぶつからざるを得ないからだ。この物語の前半部では，アイオラの弟のハリーにしても，叔父のロバートにしても，黒人男性の登場人物が描かれる際にはその軍人としての活躍がクローズアップされる。これは，第２節で触れたように，19 世紀においてはアメリカ黒人全体は男性性を欠落させた存在である，という差別的な認識が一般に浸透していたことに対する，作者の異議申立ての表われであると容易に推測できる。しかし見逃してはならないのは，男性性の獲得という課題を黒人全体が取

[3] Elizabeth Young, "Warring Fictions: *Iola Leroy* and the Color of Gender" *American Literature*, Vol. 64, No.2. (June 1992) 参照。Young は Harper の作品をアメリカ戦争小説の系譜に組み込み，洞察力のある議論を展開しているが，この作品が同時に「医学小説」としての側面があることを見落としている。

るべき目標と定めた時，黒人女性の存在は視野から消えてしまう危険がある，ということだ。[4] その陥穽からこの小説は十分に逃れることができているだろうか。

女性であるアイオラには，もちろん兵士になるという選択肢はあらかじめ除外されている。医師の場合も同様で，彼女は看護婦という一種従属的な役割でしか戦争に参加することができない。また戦争が終わってからアイオラは教師となるが，体を壊してその役割からもすぐに降りてしまう。そのように見ていくと，黒人の地位向上に身を捧げる社会改革者としての役割から微妙にずれた地点にアイオラが立たされていることが，逆に見えてくる。ジェンダーという観点から眺めてみると，やはりこの作品も当時の保守的・伝統的な考え方を脱することができなかったのだろうか。そのような疑問に明確に答えるためには，「結婚ロマンス」の展開にもう少し辛抱強くつきあってみる必要がある。

グレシャムの求婚を二度にわたって拒絶した後，アイオラは最終的にラティマー医師を結婚相手として選択するのだが，そこにはどのような作者の考えが込められているのだろうか。まず二人の結婚が，双方が黒人であるという意識の下，共に黒人社会のために身を捧げるという政治的な意見の一致の結果として行なわれている(266)ことに留意したい。グレシャムの求婚と同じく，ここでも結婚というロマンス的筋立てと，政治的主題とは不可分の関係になっている。[5] ただ今回の場合，グレシャムとの関係と決定的に違うのは，黒人としての意識を持った男女二人の結婚であるために，この結婚が，白人男女の恋愛と結婚というロマンスの常套に表面上は従いながらも，実質的には黒人同士の団結を表明したものだと言える点にある。

ただし，「人種」から「性」による役割分担という側面に目を転じると，アイオラのラティマーとの結婚が，はたしてグレシャムの場合とどれほど違っているのか，どれほど当時の考え方に照らして先進的であるのか，といった点がやや疑わしくなる要素がないわけではない。例えばラティマーがアイオラに対してプロポーズを行なう場面は以下のように描かれている。 “As a teacher you will need strong health and calm nerves. You had better let me prescribe for you. You need,” he added, with a merry twinkle in his eyes, “change of air, change of scene, and change of name.” (270) このような言葉は，二人の関係に患者と医師という上下関係が微妙にオーヴァーラップしていることを示している。また，アイオラはハリーのように，教師から政治家になっていくという進路を選択するだけの身体的な素質を持っていないことも，この場面はさりげなく暗示している。したがってここでは，ほぼ同時代の小説家 Kate Chopin の代表作 *The Awakening* (1899 年)と同様，女性が男性と同じ職業を共有し，社会の公的領域に進出していくことの生得的な限界が示されている可能性も垣間見える。ともあれ最終的に，ハーパーは伝統的な家庭観と先進的な性役割をめぐる考え方の，いわば中間地帯にアイオラを着地させているようだ。ラティマーが南部社会の中で指導的な立

---

[4] Claudia Tate, *Domestic Allegories of Political Desire: The Black Heroine's Text at the Turn of the Century* (New York: Oxford University Press, 1992)が類似の指摘を行なっている(132)。Tate は特に作品後半部分の分析に優れ，以下の注に示すように，この節における私の主張と幾つかの点で重なり合う。

場になっていく一方で，彼の妻となったアイオラは，家庭の中でラティマーをサポートする側にまわる。また彼女は再び「教師」の立場に戻るが，それはもはやかつてのような学校の教師とは異なり，教会の日曜学校において母親や子供たちを啓蒙していくという，いわば家庭の延長線上にある役柄なのである(279)。[6]

ところで，物語の終幕ではハリーと Lucille Delany というもう一組のカップルが誕生することにも，ぜひとも眼を向ける必要がある。アイオラと同様，ハリーも外見は「白人」であるが，意識のうえでは黒人としてのアイデンティティを持っている。したがってアイオラとラティマーの組み合わせと同様，ハリーとルシールとの結婚は，黒人同士の強い結託を私たちに感じさせる。ただし気をつけておきたいのは，アイオラとグレシャム，ないしはラティマーとの組合せと比較して，この結婚は独特の意味合いを持っていることだ。それは，この二人の男女の関係に表現された性役割の開放性に由来する。プロポーズするハリーに対して，半ばからかうように受けて返すルシールの姿(277-278)は，求婚者たちに対してあくまでしおらしいアイオラの態度と大きく異なる。結婚後の職業選択においても，ルシールは教師を辞めずにハリーと共に学校を積極的に運営していく(280)。夫婦の役割分担という観点からすれば，ハリーとルシールの組み合わせは，アイオラとラティマーよりもはるかに時代の先を行っているのである。

３１章の初めにおいて，アイオラは黒人の地位向上に資するような本を書きなさい，とラティマーに勧められ，彼女自身もそのような希望を漏らす。私たち黒人の生活の中には，悲劇にせよ喜劇にせよ本を書くのに十分な材料が溢れている，というアイオラの言葉(262)が，巻末の“NOTE”(282)における作者の言葉とかなり重なり合っていることなどから考えると，小説のヒロインであるアイオラこそ，作者であるフランシス・ハーパーの分身であるとするのは，ごく自然な考え方であろう。しかしだからといって，アイオラの結婚に示されているような，多分に保守的・伝統的な男女の役割分担のかたちだけが，作者の考えを反映したものであるとは断定できない。物語の終幕近くになって，ハーパーは物語の前提となってきた伝統的な考えの幾つかを崩していくところがある。例えばルシール・ディレーニは，良き母親をつくるための啓蒙活動を奨励・実践しながらも，男性もまた責任を妻と共有していかなければならないと釘をさす(253)。また，医者という職業は男性だけに門戸が開かれているわけでは，もはやなくなってきたと，ハーパーはカーマイクル牧師の口を借りて指摘する(258)。このような認識は，アイオラの結婚ロマンスにどうしてもまつわりついてくる伝統的・保守的な考え方と微妙に衝突しているようにも思われる。このように時代を先取りするような男女の平等な役割分担の考えは，アイオラよりもむしろルシールの結婚によって体現されており，その意味でルシールもまた作者ハーパーの隠れたもうひとりの分身だというのが，私の考えである。

以上のようなジェンダーに関わる考察は，解放後の黒人民衆の教育という，物語後半部

---

[5] Tate 170-171.
[6] Tate 148.

でクローズアップされる問題の扱い方を考える際にも大いに参考になる。Beacon Press版『アイオラ・リロイ』の解説で Hazel V. Carby は，黒人社会の「底上げ」(uplift)とその指導者という小説の大きな主題を，W. E. B. DuBois の有名な"Talented Tenth"(1903 年)の考えと絡めて論じている(xxiii)。カービーの意見によれば，大学を卒業しておらず，しかも混血であるアイオラは黒人の指導者になる資格に欠けており，その代わりとして，物語の終幕近くになって，「純血」で大学教育も受けたカーマイクル牧師とルシール・ディレーニが現れるのだという。だが私は，カービーの意見には基本的な考えにおいては賛同するものの，幾つかの点ではなお疑問を持つ。まずカーマイクル牧師はかなり年輩の人物で，明らかに一世代前の指導者として提示されている(257-258)。したがって彼を新たな時代の指導者と見なすことには若干の無理がある。また，「純血」である点を黒人指導者の要件として重視しすぎると，ラティマー，ハリー，ロバートといったそれぞれに指導的な立場につくようになる混血の主要登場人物（とりわけラティマー）を，過小評価する結果になりかねない。そのうえ，黒人の純血性を強調しすぎると，混血であるアイオラの家族が一旦は離散を余儀なくされながらも，やがて一連の偶然により再会し幸福を得るという感傷小説的なプロットに，黒人社会全体がディアスポラ的な状態から再集結していくプロセスを重ね合わせるという作者の見事な工夫を捉えそこねてしまう危険性もある。[7]

しかし，ルシールが新世代の黒人指導者として提示されている，という点に関しては，アイオラの重要性も同様に見ておくべきだという条件つきでだが，私もカービーの意見に賛成したい。アイオラについて付け加えるならば，彼女が属するようになる教会や家庭は，女性が伝統的に重要な役割を果たしてきた領域であって，そのような領域において女性が黒人社会の向上のために果たすべき役割はまだなくならないと，作者であるハーパーは考えていたはずだ。アイオラの身の落ち着かせ方は，長年メソジスト教会を拠点に社会改革の活動を行なってきたハーパー自身の歩んできた道を，少なからず反映しているのだろう。だが伝統的な男女の役割分担が崩れてゆきつつあることも，彼女は的確に見抜いていたはずだ。そしてそれこそ，アメリカ黒人たちにとって，頭上に覆いかぶさる影が濃くなるばかりの時代のなかで灯された，希望の光ではなかったか。新しい時代において，自分の後に続く女性たちがどのような形で黒人社会に貢献することができるのか，というモデルとして，ルシール・ディレーニの誇りと自信に満ちた姿をハーパーは読者に差し出したのだった。

---

[7] 更に言うなら，ロマンス小説的な要素と政治性の結合は，作品のサブタイトルである"Shadows Uplifted"にも及んでいる。Uplift は同時代の黒人中産階級の社会的向上を示すキーワードだった。サブタイトルの解釈に関しては John Ernest, "From Mysteries to Histories: Cultural Pedagogy in Frances E. W. Harper's *Iola Leroy*" *American Literature*, Vol.64, No.3 (September 1992)が論じている(502)が，作品のメロドラマ性との関連については触れていない。